

第 5 回 SPARC Japan セミナー2011

「OA メガジャーナルの興隆」

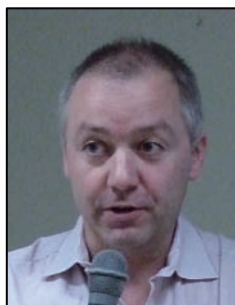
PLoS ONE と OA メガジャーナルの興隆

ピーター・ビンフィールド

(パブリック・ライブラリー・オブ・サイエンス)

講演要旨

PLoS ONE は典型的な「オープンアクセスメガジャーナル」で、2011年には約 14,000 論文を掲載し、その年の STM 分野の論文出版において 1 番でした。この成功とは別に、メガジャーナルは昨今のブームとなっています。PLoS ONE 自体は創刊して 5 年ほどですが、この 18 カ月のうちに Nature、Springer や SAGE といった出版社から同様の雑誌が創刊されました。PLoS ONE は出版モデルとしてきわめて成功した事例であり、他の出版社が創刊してみようと考えた要因でしょう。この講演では「メガジャーナル」、PLoS ONE の実績やこれまでの歩みについてお話するとともに、最近の動向に関して概説します。また、今後 5 年のうちに、このモデルが出版界に及ぼす影響とどのような方向に進むのかについて、考えをお伝えします。



Peter Binfield

Peter BinfieldのCommissioning Editorとしての出版業界におけるキャリアは、アバディーン大学で光物理学の博士号取得の後、ブリストルにある英国物理学会 (IoPP) から始まった。IoPPを経て、オランダのKluwer Academic Publishers (KAP)に移り、辞典や便覧を主に担当したのち、物理、材料、化学といった理学系分野のマネジメントや植物科学、地球環境科学分野の管理職など、さまざまなポジションを経験した。KAPがSpringerと合併したあとは、事業開発部門に属し、e-book、e-referenceやSpringer Open Choice programなどのプロジェクトに携わった。2005年に米国カリフォルニアに移り住み、SAGE Publicationsに勤務。医学や社会科学分野、約220ジャーナルを抱える部門でキャリアを積んだ。2008年4月よりPLoS ONEを手掛け、現在では世界中で最大のピアレビュー

誌となり、2011年単独では約14,000編の論文を出版している。

パブリック・ライブラリー・オブ・サイエンス

パブリック・ライブラリー・オブ・サイエンスは、出版社で、2000年10月に設立し、2003年10月から出版活動を開始しました。オープンアクセスの雑誌を7誌刊行しており、多数のプロガーを抱えるブログサイトや、ほかに PLoS Currents、PLoS Hubs も手掛けています。非営利の OA 出版社としては最大規模で、大手三社 (PLoS、Hindawi、BioMed Central) の一つです。米国を本拠とする OA 出版社は当社のみで、地理的には、私が働くサンフランシスコ

以外に、英国ケンブリッジにも拠点を置いています。スタッフは合計 120 人余りで、約 100 人が米国に勤務しています。2010 年以降は独自に採算が取れるようになり、非営利団体ながら主に PLoS ONE のおかげで現在は黒字化しています。

7 誌のうち、PLoS Biology と PLoS Medicine は、専門の編集者が運営する、審査が非常に厳しい雑誌です。その下の 4 誌はいわゆるコミュニティジャーナルで、掲載基準は世に出回っている一般的な雑誌とほぼ同じです (図 1)。今日は、2006 年 12 月に創刊した PLoS ONE について話します。今年で創刊 5 周年

を迎えた PLoS ONE は、OA メガジャーナルの時代の先駆けになったと言えるでしょう。

PLoS ONE の編集工程

PLoS ONE で一番興味深いのは、その編集工程です。すべての論文に正式な査読を行います。ただし査読の際、科学的な健全性のみを審査します。つまり、その論文は厳格であるか、倫理上適切なものか、報告の仕方は適切か、データを基に結論が導かれているかなど、極めて客観的な視点から審査するのです。

PLoS ONE では、科学論文として妥当か、基準を満たしているか、文献として使えるかということのみを判断します。特に当誌では、その論文の影響力の大きさや、どの程度の進歩につながるか、その研究の重要性などは問いません。そうした問いは非常に主観的なもので、出版前でなく出版後にこそ適切に評価できると考えているからです。つまり、PLoS ONE の掲載論文はすべて、厳しい審査により出版の可否が判断されていますが、それは論文として最低基準を満たすという意味に過ぎず、そこから読み手として論文の優劣を判断することはできません。私たちは、出版前でなく、出版後に読み手が実際にそれを判断できるよう、オンライン評価ツールを提供しようと考えています。

「最初に選ぶ」雑誌

先ほどカスケード査読モデルの話が出ましたが、



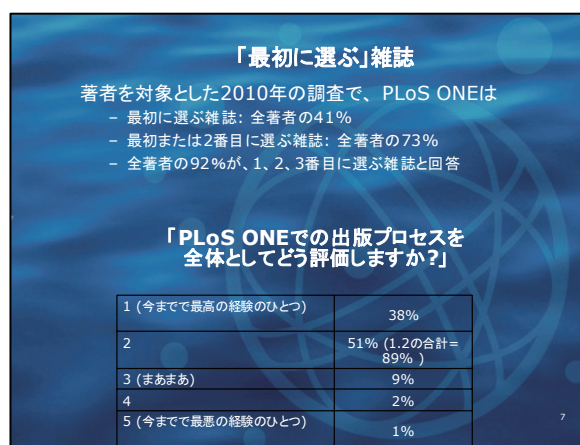
(図 1)

PLoS ONE は必ずしもカスケードモデルを採用していない点を強調しておきます。ほかの雑誌から回されるものもありますが、それは投稿論文全体の 5%にも達しません。むしろ、私たちが著者に調査を実施した結果、PLoS ONE は最初に選んだ雑誌だと答えた著者が 40%を超えています。著者の 73%は、当誌を第一候補か第二候補にしています。つまり彼らは、PLoS ONE に直接投稿するか、先に第一候補の雑誌に投稿して却下され、その後すぐ PLoS ONE に申請していることとなります。著者が第一候補に挙げたのは、多くの場合、「Nature」「Science」「Cell」といった審査が厳しい雑誌でした。

加えて著者は、PLoS ONE での掲載プロセスに非常に満足しています。38%が今までで最も満足度が高いと答え、ほぼ 90%もの著者が非常に満足、おおむね満足と評価してくれました (図 2)。

PLoS ONE 掲載論文数

私が今日ここに呼ばれたのは、PLoS ONE が成功を収めたからです。このグラフは、創刊以降の 6 カ月ごとの掲載論文数を示しています (図 3)。創刊した年に当たる 2007 年には、およそ 1200 本の論文を掲載しました。これは世界の雑誌の掲載論文数の 99.7%を上回る数です。2010 年には世界最大の雑誌になり、創刊後わずか 3 年で 7000 本近い論文掲載数に達しました。2011 年は、およそ 1 万 4000 本でし



(図 2)

た。PubMed 索引は、年間約 90 万本です。科学分野の学術論文の総数が 100 万本くらいとすれば、それ以外に社会科学、人文科学分野の論文もあるかもしれませんが、基本的に PLoS ONE には昨年、世界の全論文の約 1.5%が掲載されたこととなります。

グラフの変化、急に傾きが大きくなっている点に注目してください。これは当誌にインパクトファクターが付与された年です。PLoS はインパクトファクターに否定的で、反対運動も展開していますが、世間的には非常に重要な尺度なので、従来以上に多くの人が投稿してきたのです。

OA メガジャーナルの特徴

OA メガジャーナルの特徴を、どう定義すればよいでしょうか。第一に、オープンアクセスでなければなりません。大きな規模を確保するため、非常に幅広い領域、できればすべての領域を網羅する必要があります。PLoS ONE は、すべての領域をカバーしています。

また、論文が科学的に厳格かどうか、査読を行わねばなりません。ただし、影響力は見ません。査読で影響力を評価すると、かなり多数の論文が却下されることになり、思うように成長できないからです。そのため、論文の影響力や優劣を読み手が判断できるよう、何らかのツールや指標を提供する必要があります。

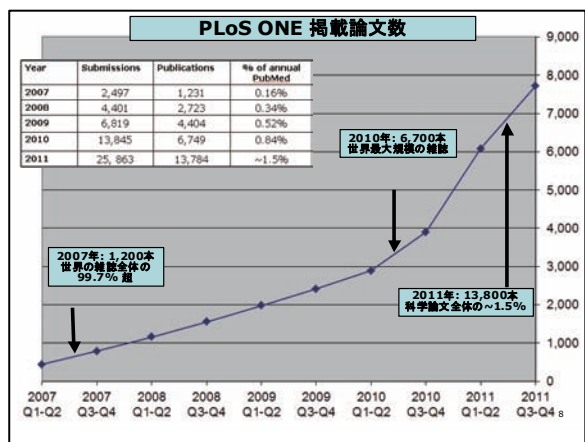
理想を言えば、拡張可能なモデルでなくてはなりま

せん。つまり、各論文を収入源として掲載コストをカバーできるようにするのが APC（著者支払い掲載料）です。雑誌の組織も、雑誌の伸びに応じて対応できる拡張性をもったものでなければいけません。OA ジャーナルは急成長しているため、急速に拡張しなくてはなりません。

メガジャーナル特有の利点

メガジャーナルには、数多くの利点があります（図 4）。例えば 200 の異なる雑誌がある場合に比べて、大規模な雑誌 1 誌なら MedLine や Web of Science などの索引更新が 1 回で済みます。著者にしても、審査が 1 回だけで済みます。ある雑誌に却下され、却下され続けてどんどんカスケード的に下に回されることはありません。規模が非常に大きいため、注目が集まり利用度や引用度も高まります。対象領域のすべてをカバーしているため、著者も分野別に雑誌を選ぶ必要はなく、すべて PLoS で対応できます。出版社の側にすれば、通常雑誌ごとに何回もやらねばならない手順を統合でき、マーケティング計画、ブログ、ツイッター発信等を一本化できます。

また、規模の経済が働くので、効率の良い運営を図れます。このモデルを使えば、雑誌の規模を制限する経済的理由はなくなります。出版前に論文をフィルターにかけるのは、リソースの少ない稀少性モデルに基づく時代遅れなやり方で、オープンアクセス配信モデ



(図 3)

メガジャーナル特有の利点

- 索引更新が1回で済む (例. MedLine, WoS)
- 著者が受ける審査/評価も1回で済む
- 利用度が高く、注目度も高い
- 規模が大きく繰り返し掲載できる / 「ジャーナル・ホッピング」の必要性が減少
- 雑誌刊行の手順を「統合」できる (例. ブログ、ツイッター発信、マーケティング計画の一本化)
- 規模の経済で、効率化を図れる
- 著者が料金を支払うOAモデルでは、雑誌規模を人工的に制限する経済的理由がない
- 出版前に主観的なフィルタリングを行うのは、質を判断する方法として時代遅れ
- 著者にとって、「より健全」な出版環境
- 一貫した基準設定の機会が生まれ、この基準が各領域における事実上の基準になる

(図 4)

ルにはそぐわないのです。

結果的に、著者にとって健全な環境が生まれます。もう特定の雑誌に掲載してもらえよう懇願しなくてよいのです。審査の厳しい雑誌に掲載してもらうため、時間を無駄にする必要もありません。規模の大きなジャーナルなので、事実上、査読や出版、プレゼンテーションの在り方と標準化を提示できる主導的役割をも担うことができます。

近年誕生した PLoS ONE の「クローン」

PLoS ONE の大きな成功を受け、近年多くの出版社が似たような雑誌を刊行しています (図 5)。これは最近刊行された PLoS ONE のクローンの一覧ですが、これはすべてではありません (図 6)。また、このリストは APC の金額順に並べています。PLoS ONE の APC は 1350 ドルなので、他の雑誌と同様の価格で一定の水準にかたまっていることが分かります。ここでは、特に興味深い 4 誌を取り上げたいと思います。

最初は Nature が出している Scientific Reports です。興味深いのは、あの Nature が刊行しているという点です。雑誌に Nature の名称は入れていませんが、系列雑誌なのは明らかで、Nature のブランドが大きく影響しています。

二つ目は、Springer Plus です。シュプリンガーで目を引くのは、組織規模の大きさです。2000 近い雑

誌を持っているため、却下された論文を Springer Plus に回せます。APC が PLoS ONE より 300 ドル安い点も、ポイントです。

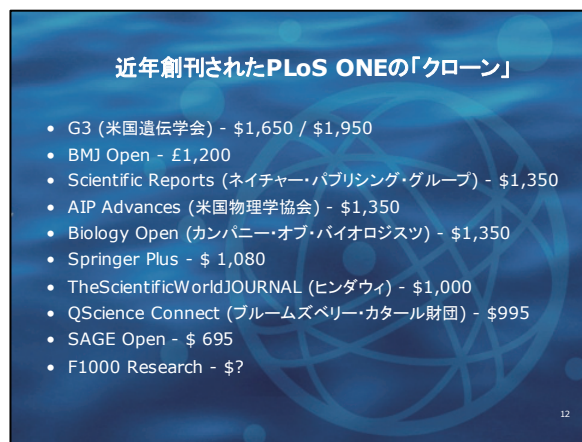
Scientific World Journal は、皆さん聞いたことがないかもしれません。エジプトの出版社 Hindawi が刊行しています。もともとは定期購読誌でしたが、昨年 9 月ごろに Hindawi が買収し、OA メガジャーナルに生まれ変わりました。この雑誌で興味深いのは、買収前の元の雑誌にインパクトファクターが付与されていたことです。PLoS ONE の例でも分かるように、インパクトファクターはこの手の雑誌の成功を大きく左右します。このリスト上のほかの雑誌はどれも、インパクトファクターが付いていません。すべてゼロから立ち上げた雑誌で、インパクトファクターが付くまでに恐らく 3 年はかかるからです。

最後に SAGE Open を取り上げますが、この雑誌が興味深いのは社会科学分野の雑誌だからです。社会科学分野の OA ジャーナルは少なく、APC は 700 ドルと非常に低くなっています。

PLoS ONE を創刊した当時、創設者でノーベル賞受賞者のハロルド・ヴァーマスはこの雑誌を「PLoS ONE は、学術的な質を厳しく審査した論文を大量に集めたものだが、重要性という観点にこだわったものではない」と評しました。PLoS ONE の一連のクローンについても、当然同じことが言えます。



(図 5)



(図 6)

「重要性」をどう評価するか

もし前述のとおりだとすれば、論文の重要性をどう評価すればよいでしょうか。学術論文への引用回数、その論文の利用回数、ブックマーキングやコミュニティ・レーティングや星での評価といった社会的指標、メディアやブログでの露出やその頻度など、いろいろな形で評価できます。

PLoS でも、こうした分類で指標ならびにデータの収集に取り組んでいます(図7)。論文単位の指標を策定し、個々の論文ごとにこのような指標データを見られるようにしています。論文ごとに指標タブを用意し(図8)、そのタブをクリックすればその論文の評価指標を見られます。一番上に、その論文の利用回数が表示されます。グラフの横軸は月です。各月の上にカーソルをあわせると、その月の詳しいデータが表示

されます。PLoS プラットフォームに加え、PubMed Central での利用回数も確認することができます。

さらに、四つの引用回数カウントサービスで評価した各論文の引用回数も表示されます。例えばこの論文は、Scopus では 19 回引用されています。クリックすると、Scopus のホームページに飛び、データを見られます(図9)。加えて、ソーシャルネットワークでの状況も確認できます。現在、CiteULike、Delicious、Facebook の「いいね!」、Mendeley などでの言及回数を評価しており、数週間には Twitter でのツイート回数も含める予定です。例えば Mendeley では、この論文の読者が 96 人います。またこの論文を取り上げたブログ記事や、トラックバックの件数もカウントしています。ユーザーが論文を星の数で評価し、各論文について議論する機能も作って



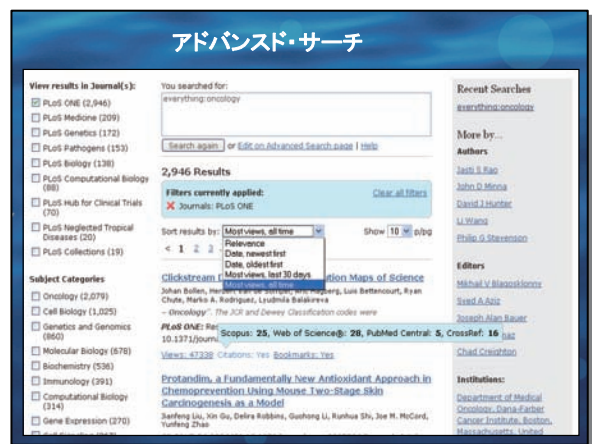
(図7)



(図9)



(図8)



(図10)

いますが、星による評価とコメントは、正直言って現在あまり使われていません。

こうして編集した指標データを、検索フォームでのディスカバリツールとして利用できます。例えば最も閲覧数が多い論文、最も閲覧数が少ない論文、引用回数が多い論文などの条件で検索し、並べ替えることもできます (図 10)。カーソルをあわせると、各サービスでの引用回数などが表示されます。

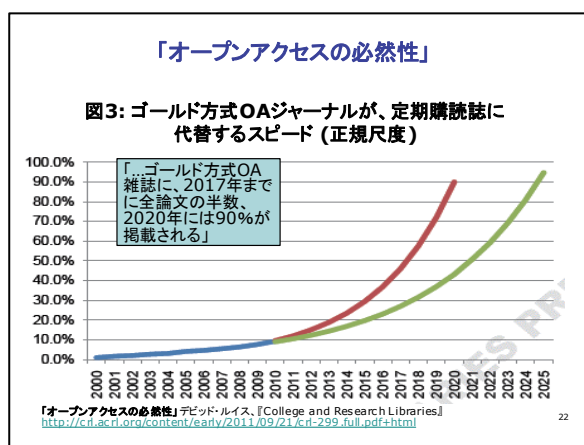
いまだ答えが出ないメガジャーナルに対する疑問

いまだ答えは出ていないものの、メガジャーナルに対する疑問を取り上げたいと思います。私たちは、影響力を評価するツールを本当に開発できるのでしょうか。今年 PLoS ONE に掲載される学術論文の本数は、論文全体の 3%になる見込みです。また、全体の 5%、10%に増えてくると、もはや一つの雑誌と呼べないのではないのでしょうか。所属組織全体より掲載論文数が多くなった場合、母体となる組織とどうかかわっていくのでしょうか。PLoS にとって PLoS ONE が将来の在り方であると信念を持ってやっていますが、市場にチャンスがあるという理由だけで参入したライバル出版社は、PLoS と同じように自社商品を信じられるのでしょうか。もし PLoS ONE が今後も成功を続け、PLoS ONE のクローンも同じ勢いで成長すれば、まもなく少数の超大型ジャーナルが市場を支配するでし

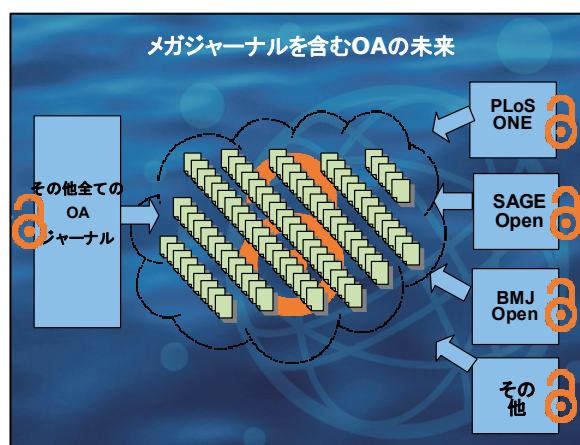
よう。雑誌数が 100 誌を切り、各誌が論文全体の 1% ほどを掲載するようになるかもしれません。そうなれば、2 万 5000 誌がひしめく現在のエコシステムはどうなるでしょうか。

これは、どれくらいの期間で OA モデルが定期購読モデルに取って代わるかを予測したグラフです (図 11)。このグラフは、OA メガジャーナルが実際に登場する前に作成したものです。個人的には、赤い線が一番可能性が高いと思います。今後 5 年以内に、こうしたメガジャーナルの興隆により全論文の 50% がおむねオープンアクセスで発表されるようになるでしょう。

OA メガジャーナルの未来は、どうなるのでしょうか。将来的には、ごく少数の大規模な OA メガジャーナルが、質の優劣は問わず OA 論文を世に送り出すようになります (図 12)。一方で、何千とあるほかのすべての OA ジャーナルは、一般に影響力に応じて論文を分類しようとしています。最終的には OA 論文が雲 (クラウド) のようにたくさん集まり、その中にはきちんと影響力があると評価を受けたものもあれば、受けていないものもあるというようになります。将来的には、このクラウドを差別化するための引用回数指標やディスカバリツール、フィルターなどを提供するツールやサービスを開発する機会が生まれると思います。既にその兆しとして、Mendelry や Faculty of 1000 のようなサービスが登場しています。



(図 11)



(図 12)

まとめ

影響力と技術的な評価を切り離して査読を行い、雑誌として成功できることを、PLoS ONE を通じて示せたと思います。出版後評価の仕組みを作ることは可能であり、この仕組みを通じて論文の質を高め、各論文の重要性を示せます。実際にこうした指標がどの程度有効か、まだ実証されていません。クローンの登場や PLoS ONE の成功から、OA メガジャーナルがすぐなくなることはないと言えます。

PLoS ONE が今後も成功を続け、同じくクローンも成長し、今後さらに多くの類似ジャーナルが刊行されれば、出版界の状況は劇的に変化するでしょう。現在、世界には 2 万 5000 もの雑誌がありますが、恐らく 100 誌くらいで済むようになります。これは多くの人にとって間違いなく恐ろしい未来図ですが、研究内容の伝達や研究自体の加速や推進につながると期待されます。

(Q1) 投稿論文掲載数のデータを興味深く拝見しました。インパクトファクターが付いた後、PLoS ONE の採択率が明らかに落ちているのは面白いですね。あなたのコメントが気になったのですが、科学的に健全な論文が投稿論文の約 50%というのは、科学領域全般の傾向を反映しているのですか。この傾向をあなたがどう考えられているか、伺いたい。その前 2 年間は、採択率は約 65%、つまり 3 分の 2 程度だったのに、インパクトファクターが付いた後に採択率が減少して 50%ほどに落ちています。

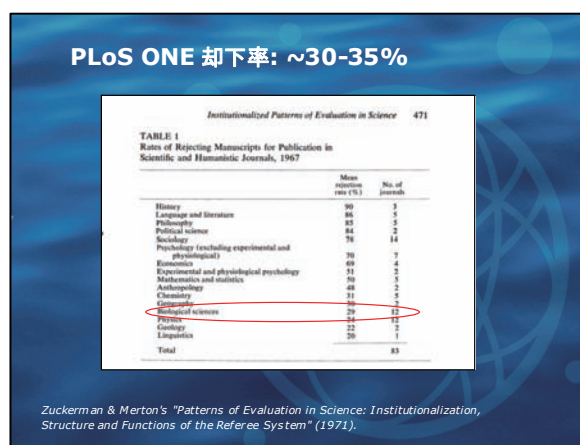
もう 1 点は、査読モデルの未来に関するあなたのご意見についてです。出版後評価の指標を導入し、私たちが影響力を判断しないことになるなら、出版後評価が査読モデルに取って代わり、一部では既に行われているように、コミュニティが出版後に論文の重要性を判断するようになるのでしょうか。

(ビンフィールド) 最初の質問については、この数字は実際と少し違います。実際には、インパクトファクターが付く前の採択率はおよそ 71%か 72%だったのが、今は 4%ほど下がって 67%か 68%程度です。数字が違うように見える理由は、一つには雑誌自体が毎月急速に成長していて、毎月投稿論文が増える一方であるのに対し、査読プロセスを終えるのに 3~4 カ月かかるからです。そのため、グラフ上のこの数字を単純にこちらで割るというようにはならないのです。

そうは言っても、確かに掲載率は 5%ほど下がっています。これは従来と異なる論文が投稿されるようになったからです。例えばインパクトファクターが付いた途端、中国から大量の論文が来るようになり、中国の投稿論文の採択率は平均と違うものになっています。

単に掲載に相応しくないという理由で却下すれば、却下率は 30%程度になります。これは妥当な数字ではないでしょうか。1971 年に実施した調査があり

(図 13)、これが基盤になると思います。この調査は、インパクトファクターや「publish or perish (出版せよ、さもなくば消えよ)」という考え方、多くの商業的な出版活動などに汚染される以前の時期を対象としています。小規模な調査で、当時は雑誌数も少なかったものの、この調査では生物化学系ジャーナル 12 誌を調べ、平均的な却下率は 30%前後でした。これは、当社において自然な状態で出た数字と同じです。私たちは、別に却下率を決めているわけではありません。



(図 13)

結果的にそうなっただけです。

出版後の査読が将来的に活用されるかどうかという質問もありましたね。PLoS ONE は当初、マーケティングで多少失敗しました。こうした指標の幾つかを出版後の査読に使用するという印象を与えましたが、実際にはそのようなことはしていません。指標は当然ながら、出版後の評価のメカニズムです。しかし、この方向を突き詰めれば、論理的には単に掲載の可否を判断するのではなく、現在よりさらに緩やかな基準を採用することもできるかもしれません。そうなれば、出版後の評価プロセスを重視し、改善していけるでしょう。実際に幾つか実験も行っていますが、今後の状況によります。

(Q2) 科学へのオープンアクセスを主張する非営利団体として、あなた方は、ほかの OA クローンを一種の脅威と感じていますか。それとも、ほかの雑誌や出版社も同じ方向に動いているのを歓迎していますか。

(ビンフィールド) もちろん、歓迎すべきことだと思っています。Nature が Scientific Reports を創刊したときは、とても嬉しく思いました。それによって、私たちのモデルが受け入れられたと感じました。ほかの人が模倣してくれることで、結果的にこのモデルが普及して OA 化が一層急速に進むでしょう。

また、そうなることが健全な競争にもつながります。PLoS ONE が世界で唯一の OA ジャーナルという状態は、健全ではないでしょう。緊張感を保つには、競争が必要です。それに私たちは実際、ほかの雑誌を支援しています。私自身、ほかの出版社に出向いて今日のように OA ジャーナルに関する講演をし、当社のやり方や他社の改善すべき点などを伝えています。

(Q3) PLoS としては今後、PLoS Biology や PLoS Medicine などのコミュニティジャーナルに関して、PLoS ONE とどのような関係を持って発展させようと考えているのでしょうか。

(ビンフィールド) コミュニティジャーナルは、OA ビジネスモデルで独立して採算が取れることを証明するために立ち上げたものです。現在、4 誌すべてで採算が取れていて、月 50 本ほどの論文を掲載しています。中小規模の会誌としては十分なモデルです。

ただ、そのモデルが世界を変えるほどの影響力を持つには 2 万 5000 誌に増えるしかありません。そんなことは、決してあり得ないでしょう。BioMed Central などほかの出版社は 300~400 誌を立ち上げて展開していますが、私たちは PLoS ONE という方式を選びました。これ以上コミュニティジャーナルを創刊する予定はありません。

(Q4) そのジャーナルが月 50 本の論文を出せば、基本的には経営していけるという話でした。それを支える APC は、片や雑誌のスケールにも依存しないし、あるいはそれによって掲載論文数にも影響しないとのことでしたが、インフレの影響や人件費増など、制作費以外の部分は年々上がっていきます。そういったものは APC に反映していくのでしょうか。同時に、全体の研究資金自体もある程度の規模を維持し、できれば多くなっていく方向に行かないと、払うべき人が払えないこともあるので、その相関性を理解したいのです。

(ビンフィールド) OA ジャーナルの APC は、恐らくその雑誌の却下率によって決まります。厳正な審査を行い、実際には投稿論文の約 70% を却下します。インフレの影響や人件費増などではなく、むしろ審査の手間に対し何本の論文を出版するかの比率によって決まります。けれど私たちは非営利団体なので、将来的にどこかの時点で APC を上げるより下げると想定されます。

(Q5) PLoS ONE は創刊当時、ピアレビュー自体にチャレンジするというポリシーで始まったと思いますが、現在はピアレビューを採用されています。今後

もピアレビューが正しく機能すると仮定して規模を大きくする予定なのでしょう。

(ビンフィールド) 今は PLoS ONE も従来の査読モデルを踏襲しています。ただ、違いとして、影響力は問わず、私たちは科学的な適切性しか見ていません。それ以外は、ほかの雑誌と同じように極めて厳しい通常の査読プロセスを取っています。確かに、恐らく当初想定していたほど画期的ではないと思いますし、トーンダウンしていると思います。

PLoS ONE は編集委員会によって運営され、3000 名の専門編集者が論文一本一本を査読しています。結果的に PLoS ONE は、彼らの意向と世の中で受け入れられるレベルのバランスを取りつつ、運営を行っています。当初のアイデアに即したより革新的な要素は、現在、別のジャーナルで展開しています。例えば PLoS Currents では、もっと斬新な試みを行っています。

(Q6) 2020 年には 90% の論文がオープンアクセスになるのではないかというお話でしたが、お金があるかどうかで出版できるかどうかが決まってくるというバイアスが発生するのではないのでしょうか。また、OA の著者チャージの見直しは、今どのぐらいの頻度で行われているか、現在の OA の著者費用負担にディスカウントのプログラムを取り入れているかどうかを教えてください。

(ビンフィールド) 私たちは使命を掲げた非営利団体なので、理由を問わず誰に対しても料金免除を認めています。支払能力が、出版できるかどうかに影響すべきでないと考えています。実際には 90% 以上の著者が正規の料金を支払っています。しかし、あなたの質問を広い意味で捉えると、すべてこのモデルで行くことになれば、支払能力はどうなるか分からないということだと思います。先ほどのプレゼンテーションでも指摘されたように、雑誌によって APC にも幅があ

り、場合によっては 8 ドルというものもあります。選択肢が多くなり、激しい競争が生まれるでしょう。

ACP のディスカウントプログラムが既にあるかという質問については、誰でも理由を問わず料金を免除しているので、ディスカウントプログラムの必要性はありません。

(Q7) オープンアクセスの場合は、インターネット上で論文が見られますが、著作権にかかわらず、比較的無断でコピーなどがされやすいというイメージがあります。オープンアクセスジャーナルの場合、著作権の収入はどのようにお考えでしょうか。

(ビンフィールド) 私たちはクリエイティブ・コモンズの Attribution license、すなわち CC BY ライセンスを採用しています。このライセンスでは、商用を含め完全に無制限に複製することができます。著者は著作権を持ちますが、再利用に関するすべての権利・制限を手離すこととなります。目的を問わず、誰でも掲載論文を利用できます。再利用者が原作者の名前と出典を表示しさえすればいいのです。当然、私たちには著作権保有による収入は生じません。通常は誰も利益を手にしません。完全無料のコンテンツに対して収益モデルを構築するのは、非常に難しいことです。

(Q7) 米国には Copyright Clearance Center という著作権管理団体がありますが、そこの関係も一切ないということでしょうか。

(ビンフィールド) ありません。

(Q8) 今日の質疑では出版社系の方が非常に食い付いており、図書館が OA メガジャーナルで役割を演じることはできるのかという焦りを感じつつ聞いています。

ディスカウントの話が先ほど出ていましたが、機関で契約してディスカウントするというビジネスモデル

を考えているのでしょうか。オーサーペイを著者が直接個別に払うだけでなく、ある機関に所属している人の分をまとめて払って、その結果ディスカウントするようなモデルがあるのですか。また、プロモーションする必要を感じていますか。もし感じているとしたら、誰に対するプロモーションをしたいと思っていますか。

(ビンフィールド) おっしゃるとおり、図書館と司書にとっては刺激的な挑戦になります。現在、図書館は収集した雑誌を管理するゲートキーパー役を務めています。今後は、著者自身が投稿する雑誌を選び、誰もが無料で雑誌にアクセスできるようになるため、そうした役割は不要になるでしょう。しかし、図書館関係者には、コンテンツのクラウドを管理するといった新しい役割を担うチャンスが出てくると思います。あなたが言うように、図書館が仲介して出版社に料金を払うといったことも可能です。大学からお金を集めて著者に配分し、出版社への支払いをまとめて行うのです。

また、最後のご指摘も非常に興味深いものです。現在、出版社は図書館がお客様なので、図書館に対して直接プロモーションをしています。しかし、オープンアクセスの世界では、著者がお客様です。私たちは、大学にいる著者に接触しなければなりません。図書館が、研究者へ当社のサービスを推奨して売り込み、プロモーションを行い、このサービスの重要性を説明する役割を担うこともできるでしょう。

(Q9) カスケードモデルについて質問です。OA 雑誌は、掲載する論文数を増やして市場を広げようとしているように見えます。それが雑誌の評判の低下につながるなど、何らかの問題や学術界への影響を引き起こすため、本体の雑誌と同じブランド名を使っていないのではないのですか。

(ビンフィールド) 却下された論文を集めた雑誌という位置付けになるのは、危険です。カスケードの底

辺にある不受理の論文を集めた雑誌には、誰も投稿したいと思いません。おっしゃるように、出版社のブランドを傷つける恐れがあるからこそ、例えば Nature などの数社は、自社のブランドを使いませんでした。少なくとも PLoS ONE は、当然ながら、却下された論文を集めた雑誌と思われぬよう努力しています。先ほど述べたように、大部分の著者にとって PLoS ONE は最初に選ぶ雑誌です。OA ジャーナルを始めようとする方にも、同じような方向性をお薦めします。個人的に、カスケードモデルは薦めません。